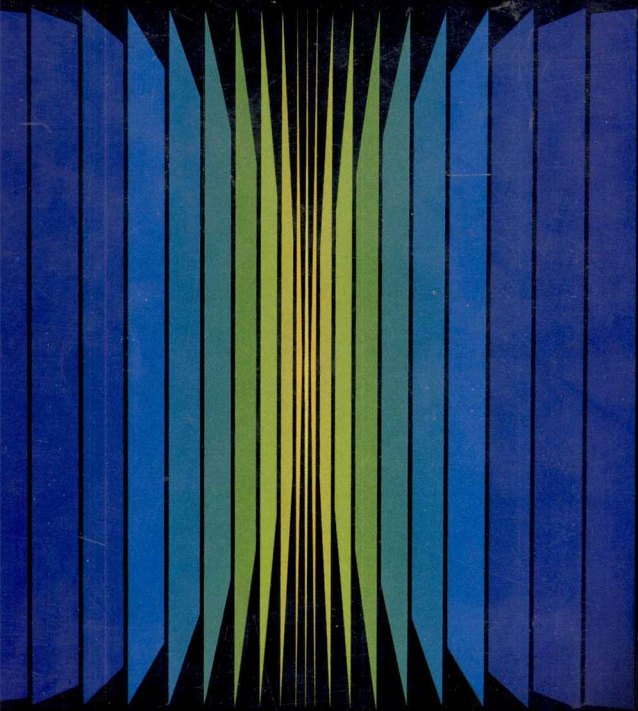


不機嫌の時代

山崎正和



不機嫌の時代

山崎正和

新潮社版

ふきげん
不機嫌の時代じだい



著者 山崎正和 (やまざきまさかず)

昭和五十一年九月十五日印刷

昭和五十一年九月二十日発行

発行者 佐藤亮一

印刷所 塚田印刷株式会社 製本所 株式会社大進堂

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社
新潮社

電話 業務〇三(266)五一一 編集〇三(266)五四一一

定価 九〇〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

不機嫌の時代 ■ 目次

第一章

I 不機嫌の自覚——志賀直哉

9

II その時代——荷風と漱石

31

III 気分の構造——鷗外

59

第二章

I 「私」と「公」の乖離

73

II 感情の自然主義

96

第三章

I 『それから』の時間

123

II 『明暗』の行動

150

第四章

I 傍観と自虐

183

II 不機嫌と実存の不安

224

あとがき

248

不機嫌の時代

第一章

I 不機嫌の自覚——志賀直哉

ひとつの名状しがたい未知の気分が、そのころ、やうやく生まれたばかりの日本の中産知識階級の家庭を侵し始めてゐた。

それは、捉へどころのない漠然とした気配ではあつたが、しかし、人びとはそれがこれまでの経験のなかにない、ひとつのえたいの知れない鬱屈であることには気づいてゐた。明治四十年代の初頭、すなはち、日露戦争の戦後がしだいに「戦後」として意識されるやうになつたころ、人びとはにはかにまざまざと、それが自分の日常を浸してゐることを自覚し始めたやうであつた。その異様な気分は、まづ、たとへば次のやうなかたちで、まだ二十代の青年の心にも影を落してゐた。

湿気の烈しい、うつたうしい気候から来る不機嫌には私は中々打ち克てなかつた。そして其の不機嫌は多くの場合他人に対する不快と一緒になつて私を苦しめるのが常であつた。私は其頃

祖母に対して何となく不快でならなかつた。私に対して或警戒でもしてゐるやうなのも私の気分を苛々させた。私は其時の気分で二日も三日も此方からは一切口をきかない事などもあつた。祖父は前年の正月に胃癌で亡くなつた。そして今は私と云ふものに唯一の望を置いてゐる七十歳を越した祖母に対してする科しきとしては少し残忍な感じも時々はした。然しこんな残忍もそれを安心して働ける人間は私にとつて祖母以外一人もない。こんな事が自分には云ひわけになつてゐた。(志賀直哉『大津順吉』)

「何となく不快」な気分として感じられるこの鬱屈は、第一に、それを惹き起した原因を明確にさし示せないところが特色であつた。それは一面で、「うつたうしい気候」そのものがもたらす不快であるやうにも見え、同時に、「祖母」といふ特定の他人が惹き起した不快であるやうにも感じられる。そもそも不快なのは外界の雰囲気であるのか、それとも主人公の内面の状態であるのか、この気分はそれについての明瞭な区別もなく彼の心身を包んでゐるのである。そして、原因が明らかでない以上、主人公はそれを投げつけて発散させるべき正当な対象についても確信が持てない。一応は「祖母」を選んで彼女に漠然たる不快をぶつけながら、彼はそのことに微妙なうしろめたさを覚えてゐる。とつてつけたやうに、祖母が彼に一種の「警戒」の表情を見せるといふのも、主人公がわれながら理不尽な自分の態度に加へたいひわけにすぎないことは明白であらう。

原因も対象も明確でない内面状態といふものは、当然のことながら、それを抱く本人にたいし

て不安な異物感をあたへる。通常の怒りや憎しみなら、人間はその昂まりに一体感を覚え、その感情が自分のものだといふゆるぎのない確信を抱くことができる。いはば怒りや憎しみは本人にとつて内から湧き起る生の要求であつて、人間は主体的な態度でそれを表現したり、行動の起動にしたりすることができる。だが、ここで主人公が漠然と感じてゐる異様な不快は、彼自身の内面状態でありながら、そのやうな主体的な一体感を味はせてはくれない。明らかに、彼はこの不快を自分のものだと感じきれないのであるであつて、あたかも外から降りかかつた災難のやうに、それによつて自分が「苦しめ」られてゐる、と感じてゐるのである。

さらに、この気分は通常の苦痛や不快感とは違つて、たとひ筋違ひでもそれなりに明快な、主張すべき訴へといふものを含んでゐない。主人公はその不快を激しい叫びや、動作に表はすことはできないのであつて、せいぜい、「二日も三日も此方からは一切口をきかない事」のほかに、それを表現するすべはないのである。しかもこの場合、注目すべきことは、ここにさりげなく「此方からは」といふ一句がそへられてゐることであらう。主人公は祖母にたいして寡黙を責め道具に使ひながら、それにもかかはらず、祖母との会話を完全に拒否したわけですらなかつた。事実、彼は祖母の問ひかけには面倒臭げに答へてをり、自分の方から会話を打ち切つたといふ印象を注意深く避けてゐるやうにさへ見える。いひかへれば、彼の不快は他人を完全に拒絶するほどの主張をも含んでゐないのであり、その表現は正・負いづれの方角にも極度に消極的なものだ、といふほかはない。自閉的でありながら、しかも純粹な隔絶と孤独を選び得ないのが、この気分のもうひとつの特色であるらしく、主人公はつねに、この「残忍な」ふるまひを「安心して働ける」

相手を必要としてゐるのである。

この『大津順吉』が書かれたのは明治四十五年の秋であり、この年、作者の志賀直哉は二十九歳になつてゐた。しかし、いくつかの資料から、作品の材料となつたのは明治四十一年の事件であり、作者、二十四歳のときの体験であることはほぼ確実に推定することができる。四年間の距離をおいた直哉はかつての未知の鬱屈を冷静に観察し、きはめて正確にそれを「不機嫌」と命名した。そして、引用の一文に続く次の会話の多い描写は、この内面状態の形象化としておそらく古典的傑作といふべき鮮やかさを示してゐる。

或午後、私は二階の部屋で新しく着いた外国の雑誌を見てゐると祖母が登つて来た。

「角筈は何日です」如何にも機嫌を取るやうな調子で云ふ。私は一寸間を措いてから、

「あしたです」と答へた。

「お庭の枇杷がよく熟したけど、持つてつて上げませんか？　もう烏がかかつたから此次と云つたらアラカタ無くならうもの……」

私を取り合はない様子を見せてゐるので、祖母は縁側へ出て往来を眺めてゐた。私は又祖母が其処にゐると云ふ意識ばかりはつきりして雑誌に読み耽られなくなつた。私は同じ便で来た、The Theatre と云ふ演藝画報を開けて、その写真版に只眼をさらしてゐた。

「米国の田中さんからか」

「ええ」

「此方からお送りしますか？」

「送つてますよ」

「矢張り雑誌ですか」

「ええ」

私は一字でも余計な字をいへば、それだけ好意が現れてでも了ひさりに或努力を以つて出来るだけ切りつめた返事をしてゐる。

「近頃雑誌にいい小説が出ますか？」

「どうですかネ」

又話が途斷れた。

祖母は後手をして今更らしく鴨居の額などを見て廻つた。

「何か丸善から買ひたい本でもありませんか？」

「今は別にありませんネ」

又沈黙が来た。たうとう祖母もそれに堪へられない風で独言のやうに、

「明日先生のお家へ枇杷を持つて行くなら今日の内に熊吉にでも庄兵衛にでも取らせなければならぬ」こんな事を云ひ／＼静かに用心をしながら急な梯子段を降りて行つた。ドンと一番下の段を降りる音が暫くして聞えた。

其後で私は独り泣いた。泣くと、いつも頭痛のするのが私の癖であつた。私は其儘昼寝をしてゐた。

この長い描写のなかにはほとんど無駄といふものがなく、会話の隅々にいたるまで、あの鬱々たる気分が特有の蒸れたやうな臭気を放つてゐる。「如何にも機嫌を取るやうな」祖母の口調を意地悪く確かめたるへで、「一寸間を措いて」、そつてなく答へる青年の表情は眼に浮かぶやうである。彼は、身近に祖母があるといふことを総毛だつほどに感じながら、あたかもそれから身を隠すやうに、揚げた演藝画報の写真ページに眼をさらしてゐる。それは彼の意識にとつて一枚の紙張りの帳なのであり、彼と祖母とのあひだを注意深く、完全には隔絶しない程度にさへぎつてゐる。青年はその蔭に潜んで十分に間合ひを計り、滲み出るやうな「不機嫌」を過不足なく祖母の神経にとどかせるのである。「一字でも余計な字をいへば」、この計算された悪意はたちまち毀れるのであるが、しかし彼はまた、自分の悪意が過度に露骨になることにも用心しなければならぬ。あまりにも露骨な表現は彼の焦燥を積極的な攻撃に変へてしまひ、さうなれば、彼は相手の側からその理由と動機を問ひかへされる恐れがあるからである。だが、自分にとつてもまるで異物のやうに侵入して来た気分について、彼にはそれがなぜかと問はれて、いつたいどんな答へができるであらう。無理に説明を探さうとすれば、彼は自分自身の内面にたいして嘘をつかねばならず、そのことはますます彼を新しい不機嫌のなかに突き落すことになるにちがひない。不機嫌な人間にとつて、もつとも恐ろしい敵は自分が客観化されることなのであるから、彼は十分に悪意を表明しながら、しかもその事実の証拠を絶対に残さないやうに努力しなければならぬのである。